

2024 年 1 月 20 日

2024 年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科課題研究

乳児家庭全戸訪問事業で家庭訪問を行う助産師による
母親の精神症状を予測するアセスメント視点とそのケア

Assessment and Care to Predict Maternal Psychiatric Symptoms by Midwives
Making Home Visits in the Infant Home Visit Project: A Qualitative Study

学籍番号 : 22mw007

氏名 : 北村美咲

要旨

【目的】乳児家庭全戸訪問事業（以下、全戸訪問とする）で家庭訪問を行う助産師が、母親の産後うつ病や他の精神疾患の可能性のある状態を予測するアセスメント視点や、その支援の実際について記述すること。

【方法】全戸訪問で家庭訪問を行った経験がある助産師にインタビュー調査による質的記述的研究を行った。

【結果】

全戸訪問で家庭訪問を行った経験がある助産師 5 名を対象にインタビュー調査を実施した。母親の精神症状を予測するアセスメント視点について、母親の状態や子育て状況に加え、母親を取り巻く人間関係や、住環境もアセスメントしていた。母親の精神症状を予測した際のケアについて、自宅という環境を活かして思いを受け止め、関係性を築くとともに、必要時に適切なサービスに繋げるなどのケアを行っていた。助産師の訪問時の心掛けや行動について、何か困ったら相談する場所があると母親に知ってもらい役割を担うなどの心掛けや行動を実施していた。全戸訪問を行う助産師の連携先については保健師との連携が語られた。助産師の考える全戸訪問の課題について、訪問時期と頻度、訪問助産師の報酬、訪問ケア内容の質の 3 点が挙げられた。

【結論】

全戸訪問を行う助産師は、母親自身の状態や子育て状況に関して、特に悩みの多い授乳にまつわる身体的・精神的負担などを中心に、母親が健康である状態をアセスメントし、またそれらからの逸脱をアセスメントし、精神症状を予測していた。さらに、収集した情報を助産師自身の過去の体験や他の母親との関わりと比較することによって、母親の「気になる」徴候を拾い上げ、継続的な支援に繋げていた。また、専門職であることを活かした育児情報の提供や相談によって母親や家族の不安の軽減に繋げていた。全戸訪問の課題として、訪問時期と頻度について、多くの支援を必要とする産後早期の訪問が有効的ではないかと語られた。また助産師の対価については、授乳など助産師の専門性を活かしたケアを強みとして発信し、全戸訪問に貢献していく余地があると示唆された。訪問ケア内容の質については、助産師が単独で行うケアについてチームで共有し振り返りを行う体制づくりや、評価尺度の開発によってさらなる訪問ケアの質の向上が見込めると示唆された。